

# 日本の防衛力のあり方

第五代 統合幕僚長  
川崎重工工業株式会社 顧問



河野 克俊 氏

かわの  
河野 克俊

聞き手  
むらたて いさお  
室舘 勲  
(株式会社 潮流社)  
代表取締役社長



——本日はよろしくおねがいます。河野さんは一九七三年に防衛大学校に着校、卒業後、海上自衛隊に入隊。二〇一九年に退官されるまで四十六年間の自衛官生活を務め上げられました。二〇一四年から二〇一九年の四年半は統合幕僚長を務められました。本日は日本の安全保障に関わる話もお伺いできればと思いますが、まず河野さんが海上自衛隊に入隊するまでのきっかけからお伺いできますか。

河野 父親の影響です。父は、旧帝国海軍の

軍人で、終戦ののちに海上自衛隊に勤務しました。そういったこともあって、父は息子を

自衛隊に入隊させたかっただようです。学生時代から自衛隊の行事などに連れて行ってもらううちに、次第に自衛隊って良いなと思うようになりまして。しかし高校三年生のときに、満を持して受験した防衛大学校の入学試験は、なんと不合格でした。

——不合格ですか。

河野 父とともにショックを受けながらも別の道に行こうか、どうしようかと思って浪人を決意していた四月一日に、防衛大から家に電報が届きました。「四月四日に着校を命ずる、防衛大学校」とカタカナで書かれていました。どうやら入学者の数が足りず、不合格者の中から補充合格者を出していたようです。父は大喜びでしたね。急いで準備をして慌ただしい中、他の学生に数日遅ればせながら、防衛

大学校への入学に至りました。

——それは運命的ですね。

河野 ところが、今度は入校手続きの身体検査で不合格となってしまいます。医務室に呼ばれて「これでは入校させられないからお引取りください」と言われました。ただ「今後、我が身に何が起きて自己責任とする」という旨の誓約書を書いたら入校できるといふことで、父に急かされつつ、署名捺印をしたのを覚えています。それで条件付きの補充合格という形で、私の自衛隊人生が始まったわけです。

——その始まりから、統合幕僚長にまでなられるのですから、人生とはわからないものですね。

河野 四十六年間の自衛隊生活が、この紙一枚から始まるとは、思いもせませんでした。ですから、本当に人生はどう転ぶかわからな

いですね。統合幕僚長になると、防衛大学校の卒業生に対して話をする機会があります。そこで私は、自分のそういった人生で得た教訓から「不安なことはたくさんあるだろうけれども、人生はどう転ぶかわからない。必ず道は開けるから、多くの逆境にまみれても、常に前向きに人生を生きてほしい」ということを伝えていきます。

——四十六年間を務め上げる中で、着任当時の自衛隊に対する世論と、現在の世論とでは全く変わってきたのではないですか。

**河野** はい。私が防衛大に入校したのは昭和四十八年でした。当時は昭和四十四年に東大紛争、四十五年に日航機よど号事件、四十六〜七年にかけて連合赤軍事件と浅間山荘事件が続発していた時代です。いわゆる左翼の人たちがファッショナブルに見られて女性にモテていた時代で、逆の権力側と見られていた

しかし、人員を派遣しなかった日本が感謝されることはありませんでした。イラクから解放されたクウェート政府が掲載した感謝広告には、日本の名前や日の丸がありませんでした。国際貢献としては、いわゆる人的貢献を求められているんだと言うことですよね。それをきっかけに自衛隊のあり方が見直されることになりました。

そして一九九一年四月二十六日、ペルシャ湾に五百十一名の掃海部隊を派遣しました。これが、自衛隊が任務を帯びて海外に派遣された、初めての事例です。世論の反発も当然ありました。なぜかというところ、国民にとって自衛官の顔が見えずに不信感があったからです。「私達も普通の人間です」そう言っても信じてもらえない。行動で示すべきだが、その機会すら与えられない。これについては私も挫折感がありました。

自衛隊に対する世間の印象は、はつきり言って最悪で、世間の風当たりは非常に強かったですね。四十六年が経ち、いまでは自衛官に対しての世間の目は好印象がほとんどで、嬉しい限りです。

——自衛隊のイメージが変わるきっかけは何だったと思いますか。

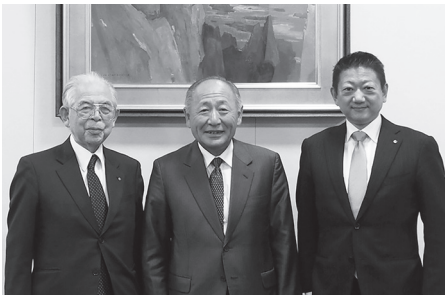
**河野** 「東日本大震災を機に自衛隊の評価が変わりましたね」と言ってくださる方も多いのですが、ずっと見てきた私からすると、きっかけは、一九九〇年の湾岸危機・湾岸戦争だと思います。

当時の日本は、外国の紛争などに対してはお金を出さずだけで人を出すことはありませんでした。湾岸戦争も同じです。サダム・フセインがクウェートに侵攻したことに対して、アメリカが多国籍軍を募った。そこに日本は、130億ドルという巨額のお金を出しました。

しかし状況が変わったのが、掃海部隊が日本に帰還した時です。ちゃんと任務を全うして日本に帰還してきた自衛官らの顔がテレビに映った。軍国主義の象徴だと言われていた自衛官も同じ人間なんだ、ということがテレビを通してお茶の間に伝わっていったのです。これが、自衛隊の印象が変わる一番のきっかけだったと、私は思います。

——そこからイメージが変わっていったのですね。

**河野** そしてPKO法案が通って、その後も着実に海外派遣任務を果たします。そうして信頼を積み重ねていく中で発生した、平成七年の阪神淡路大震災。しかしこの時、災害派遣の要請が遅く、初動が遅れたと言われています。でも、遅きに失したとはいえず、国民の助けに貢献ができたことは大きかったです。二〇〇一年、アメリカ同時多発テロ事件が起



お願いするということ、日米同盟の信頼性は崩れます。ですから日本の安全保障の役割を、しっかり自国で引き受けるべき姿、日本のあるべき姿

きました。自衛隊は多国籍軍に対する後方支援を行い、国際貢献を果たすことができました。こうして一つずつ、自衛隊の活躍のステージが上がっていったわけです。

——憲法の制約もある中で、縛りに耐えながら、でもタイムリングを見ながら着実に実績と信頼を積み上げて来られて、今の自衛隊があるわけですね。

**河野** はい。私が離任するときに、自衛隊に対する世論を見ると、好印象がほとんどです。私は不自信を持たれていた時代を知っていますから、今の状況と比べると、自衛隊が歩んできた道は絶対に間違いじゃない。そう言えますね。

「今、自衛隊が信頼されていますね、東日本大震災の活躍の賜物ですね」と言われることがありますが、私はそれに対しては半分はイエス、半分はノーだと思っています。東日

戦勝国と敗戦国の条約であることは間違いありません。力のない日本が、経済復興に専念するためにも、力のあるアメリカに国家の安全を託した条約です。

しかし日本の状態は当時と変わり、経済発展を遂げ、自衛隊も防衛力を増しました。にもかかわらず、日本の安全保障をアメリカに

お願いするということ、日米同盟の信頼性は崩れます。ですから日本の安全保障の役割を、しっかり自国で引き受けるべき姿、日本のあるべき姿

お願するとい、偏った関係が続いています。この偏りを解消しないと、日米同盟の信頼性は崩れます。ですから日本の安全保障の役割を、しっかり自国で引き受けるべき姿、日本のあるべき姿

——「日米安保条約があるから、アメリカは日本を守ってくれる」と思っている人が多いですが、勘違いしてはダメです。アメリカも憲法の手続きに従って戦いますから、何もしない日本をアメリカの軍人が命を懸けて助けるなんてアメリカ国民が許すでしょうか。

いつも日本は尖閣諸島を、日米安保条約の適用範囲かどうかをアメリカに確認していますが、まずは日本が自国を守る気概と行動があつてこそその話です。アメリカの元国務副官であつたりチャード・アーミテージ氏がこう言ったそうです。「日本の兵士が米軍の前で戦っていたら米軍の兵士も戦う。日本の兵士が横で戦っていても米軍の兵士は戦う。しかし、日本の兵士が米軍の後ろにいれば米軍は戦わない」当然の話なのですが、それを日本人はわかっているのかは疑問です。

本大震災での貢献も間違いなく大きな出来事でしたが、私の中では、ペルシャ湾の掃海部隊がスタートです。そこから三十年、任務の遂行と、訓練を積み重ねた結果が今の信頼につながっていると思っています。任務を遂行する、信頼に応える、これらは日々の厳しい訓練の賜物ですね。一方で「築城十年落城一日」という言葉もありますので、気を引き締めてかからなければならぬと思っています。

——アメリカ、中国と、大国がいる中で、現在の日本の防衛ということに関しての見解をお伺いしたいです。

**河野** 日本は海洋国家です。世界ナンバーワンで同じく海洋国家のアメリカとは、価値観を共有しています。その意味で日米同盟は絶対に必要不可欠だと思います。日米同盟の基礎は日米安保条約です。ただ、吉田茂総理大臣の旧安保条約にまで遡れば、それはやはり

——共に戦う気概が必要ですね。

**河野** 私の持論として、日米同盟のように、同盟は二カ国間でおこなうのが一番強固だと思います。多国間で締結すると、同盟の調整が大変煩雑になると思いますので、多国間の同盟よりも、強固な二国間同盟の方が有益だと思っていますね。

——いま、防衛費は対GDP比で約1%です。世界の標準は2%であると言われていて、日本も五兆円から十兆円に増やすべきだという議論もあります。河野さんはどのようにお考えですか。

**河野** これも持論ですが、五兆円というのは、既に大きな金額だと思っています。効率的に運用すれば、今の予算でも今以上に防衛力を強固にできると思います。逆に言うと、今の日本の防衛予算は非効率だと思っています。なぜなら、扱っている兵器や装備が割高で

を持つべきだ、という兵器体系が変われば、今よりも効率的な予算運用ができることでしよう。効率的で柔軟な運用を目指せば、同じ五兆円であっても、相当充実させることができます。その上で防衛費増額の議論に向かうのが健全かと思っています。

——なるほど。まずは予算運用の構造を変えていくことが大事だということですね。その中で、今後、平和を維持して戦争にならないために大事なことはなんでしょうか。

**河野** やはり基本的には外交だと思っています。軍事力、防衛力というのは最後の盾ですから、国家間のトラブルなどは外交で解決することが基本です。一方で、軍事力を持つていれば外交力が増すことも厳然たる事実です。防衛力とは、戦争になったときに守ってくれる力という側面もありますが、もう一つ重要な役割というのは抑止力です。戦争にならないた

す。日本の防衛産業は武器輸出三原則の縛りの元、海外へ輸出できませんでしたから、実質的には自衛隊しか取引先はいません。すると仕様はおのずと、自衛隊のオーダーメイドという形になります。オーダーメイドという聞こえは良いですが、需要が少ないためにコストが割高に上がります。逆にイスラエルなどは、武器を輸出しているのでコストが安い。そういう産業構造になっています。防衛装備移転三原則になってからは条件つきで海外への移転ができますが、まだ軌道に乗っておらず、そこが課題だろうと思います。

もう一つは「専守防衛」という言葉を堅く解釈しており、兵器体系も基本的に防衛オンリーになっています。一般論として、防衛兵器より攻撃兵器のほうが格段に安いです。必然と割高になっていくということです。専守防衛の目的のためにも、ある程度の攻撃兵器

めの抑止力としての力も重要です。ですから日本のような国力のある国が軍事的に弱かったとしたら、地域の平和と安定にとって非常に良くないことです。やはり簡単には攻めて来られないような体制を組む必要があります。戦わずして勝つのが本来の防衛力の目的だということです。

——自衛隊の存在と、防衛費・防衛力のあり方について、非常に示唆に富んだお話、ありがとうございます。

■かわの・かつとし■

一九五四年生まれ。

一九七三年 防衛大学校入校。

一九七七年 防衛大学校卒業、海上自衛隊入隊。

二〇一〇年 統合幕僚副長に就任。

二〇一二年 第三十一代海上幕僚長に就任。

二〇一四年 第五代統合幕僚長に就任。

三度の定年延長の後、二〇一九年に退官。